

3-18. NPO 法人国頭ツーリズム協会（沖縄県国頭郡国頭村）

(1) アドバイザー派遣申請の背景

国頭村は、世界自然遺産候補地になっている琉球諸島の中でも、やんばるの森の核心地域を有しており、現在は、森林地域を活用したガイドツアーや森林セラピーを推進している。環境省や県は、国立公園及び世界遺産地域指定に向けての施策を進めているが、米軍基地問題等により指定にはなお時間を要することが予測される。

以上をふまえ、現在森林地域のツアーを実施している団体として、関連団体の連携を強化するとともに、地元ガイドの育成や環境教育的要素を深めたツアープログラムの開発を進めていくことで、今後の世界遺産指定に備えていきたい。

(2) アドバイザー派遣の概要

日 時	平成 25 年 1 月 21 日（水）～平成 25 年 1 月 23 日（木）
場 所	国頭村環境教育センター やんばる学びの森
ア ド バ イ ザ ー	公益財団法人キープ協会 環境教育事業部 シニアアドバイザー 川嶋 直 氏
参 加 者	国頭村環境教育センターやんばる学びの森スタッフ他 10 名 環境省やんばる野生生物保護センター職員 自然保護官他 4 名 県内エコツアーガイド（東村・大宜味村・名護市等） 6 名 琉球大学学生 2 名 その他国頭村民 2 名 合計 24 名
スケジュール・方法	【1 日目】 やんばる学びの森ツアー体験・指導、新規ツアー視察・指導、講演会・ワークショップ 【2 日目】 やんばる学びの森ツアープログラムインタープリテーション指導（施設内散策路を使ったガイドウォークツアーのインタープリテーション指導）



(3) アドバイスの内容

(やんばる学びの森ツアー体験・指導)

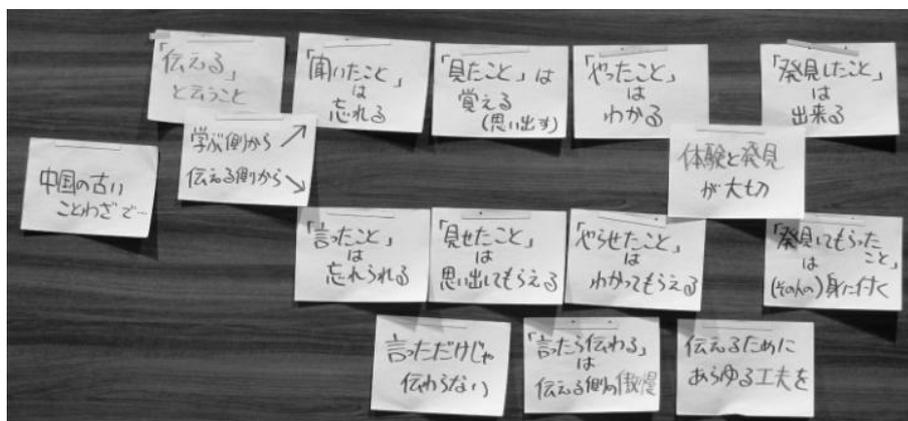
- ・ お客様に合わせてガイド内容を多様化する。(植物好きのお客様に合った内容、学習しに来た学生、そんなに植物に興味のないお客様、それぞれに対して)
- ・ 本をもって歩くのも良いが、A4 か B4 に写真を印刷してクリアファイルに入れて見せる。生物や森の絵や写真、生態系の絵も合わせて見せると良い。(人数が多いと本の説明文が見えない)
- ・ 各コースを歩く時、ガイドはそのコースの地図を持ってお客様へ今はこの辺りです、と所々で伝える。(お客様は初めて来る場所で、今どの辺りなのか分からない)
- ・ 図鑑を見せながらのブリーフィングは短めにして、森を歩きながら説明するのも良い。最初にあまり期待を持たせ過ぎない方が良い。
- ・ 見れた聞けたが体験できない場合の手段も考える。
- ・ お客様を受け身にさせるのではなく、クイズを出したりして考えてもらう。
- ・ たくさんのトピックを持つよりも、少ないトピックでネタを磨く！説明が多すぎても記憶には残らない。
- ・ ツアー終了後、お客様に対してどうなってほしいかというイメージを最初に作って案内する(テーマを持つ)。

(講演会・ワークショップ、フィールド実習)

- ・ 年齢層にあわせた伝え方のポイントは？：
最終的に参加者が何を感じたかを言語化することが重要と考えており、大人には漢字 1 文字、小さい子には色をきっかけとして表現してもらっている。
- ・ 同じようなゲームはやっているが、やり方によってその楽しみは大きく異なる。楽しむための工夫を盛り込み、1つのゲームを洗練させることが大切。
- ・ つかみの部分(コミュニケーションの取り方)が勉強になった。
- ・ 全体的に笑ってばかりいられた内容だった。とても楽しめながら学べた。知識を伝えるだけのガイドではなく、五感を交えながらのツアー内容はガイドもお客様も楽しめると感じた。ただ、お客様がずっと受け身にならないように、参加するばかりにならないように、知識を伝える事と、ネイチャーゲームを半々に交えてツアーを行えるように考えていこうと思った。伝えるネタを多く作りすぎず、少ないネタでも伝わりやすいようにネタを磨く、そして、何でもシンプルに伝える。また、一番印象に残ったのは、植物の名前ばかりを伝えても相手の頭には残らない。これ何ですかと聞かれて、これは〇〇です。と答えるよりも、何ですか？と聞かれない様に話術やゲーム等で相手を楽しませる事が大切。これ何ですか？と聞いてくる人は、ガイド内容をつまらなく感じているサインを出しているのかも。という事を聞いて、植物の名前を覚えるのも大切だが、そういう考え方もあるんだと少し楽になった。でも、植物の名前を知りたいだけのお客様もいるので、その時その時のお客様に合う内容でツアーを行えるように頑張らなければならない。改めて物事は違う視点から見られて考え方もさまざまだと感じた。
- ・ KP 法による講演と、2日目の体験まで参加できた事で、記憶と体に残る研修に参加できたと実感を持ってました。伝えたい事を、ただ多く語るだけでは伝わらない、楽しみながら体験してまず興味を持ってもらう手法、コツのような物を教えてもらいました。コミュニケーションは簡単なようで、難しい。初対面の人と限られた時間でどんな風に体験してもらうのか、自分なりの形を探してみたいと思います。
- ・ 川嶋氏の伝え方は強制的でなく、内容にメリハリがあり笑いもあり話だけで自分自身驚きながら、どんどん引き込まれていくのを感じました。また流れがスムーズかつ楽しさがあるのにテーマからずれずに伝えている方法はとても勉強になりました。第1部の話だけでもとても勉強になったのですが、第2部のフィールドでのプログラムに参加することでインタープリテーションの点からだけでなく、川嶋氏のプログラムは初

体験ばかりで「視点を変えてよく見てみよう」のテーマにおいても新しい発見が多くとても新鮮でした。

- KP法は、大がかりな道具が必要なく気軽にプレゼンができて便利。掲示する場所と方法は事前に準備していないといけませんね。
- 視点を変えると別の世界が見えてくるのが、とても新鮮で楽しかった。小さな鏡ひとつで、上を見たり、裏を見たり、万華鏡にして創作を楽しんだり、(鏡は)使える道具だと思った。
- 目玉が入るだけで、途端に命が宿る！！凄い！！表情豊かな森の妖精探しは大人も子どももはまります！そういう視点で、樹木の隅々まで見てしまいます。きっと思いがけない発見がいっぱい出てくると思う。
- 毎回毎回の参加者との「良い関係づくり」が、ツアー内容の充実、満足度につながる。それはやはり、数多くの場数を踏み、経験を重ねることか。
- 体験を楽しんで、発見し、考え、想像し、伝える...を、まず自分から実践したい。
- 今回の講習に参加して感じた事は、いかに参加者に体験してもらう事が大切かということだった。現在行っているツアーは、いかにこのやんばるの自然を参加者に伝えるかに重点をおき、自然に興味を持ってもらえるように自然の解説を行ってきた。しかし、今回の体験では自然の解説よりも、体験に重点が置かれていた。また、そうすることで参加者一人一人が体験し感じる事ができ、自分なりの感想やまとめを持ちやすくすることができていた。説明の多いツアーだとあまり自然に詳しくない人や、子どもたちには、ただ漠然と「楽しかった」という感想のみで終わることが多い、体験する事で参加者の自然に対する興味・関心を引き付ける事ができると感じた。今回の体験を基にして今後のツアーを作りかえるのではなく、現在行っているツアーの中で、参加者に合わせ説明・体験のどちらを中心にするかを臨機応変に対応できるように参加者にあったツアーを展開させていきたい。その為に、プログラム用のアイテムの充実や、勉強会等でスキルアップを目指し、詳しい解説を求める参加者・自然と触れ合う楽しみを求める参加者等さまざまな参加者に、更に質の良いツアーを提供していきたい。



(4) アドバイザー派遣の効果

●参加者や関係者に与えた効果

- ・ 多様性豊かな動植物の解説やマリンスポーツ等のアクティビティを主とする沖縄のエコツアーガイドに対して、通年楽しめる参加型のガイドツアーを、フィールド実習を通して参加者が体験することができた。
- ・ 今回の研修によって、特にガイド業を行っている参加者は、現在行っているガイドツアーについて、その目的やテーマ等の本質を見つめ直すきっかけとなり、沖縄におけるエコツアーガイドの質の向上につながるものと考えている。



●今後の期待される効果

- ・ 環境教育分野において第一線で長年活動されてきた講師の活動拠点である（公財）キープ協会について、その規模や活動内容を紹介いただいた。
- ・ 宿泊、環境教育プログラム、物販等で複合的に経営を発展させている具体的な事例を知ることで、エコツーリズム事業の今後の発展の可能性を感じることができた。
- ・ また、今回の研修参加者は、近隣市町村の同業者の若手ガイドが中心であったため、研修・懇親会がさまざまな情報交換の場となった。今後、やんばる 3 村を中心としたエコツーリズム関係者のやわらかな連携につながることを期待される。

(5) アドバイザー派遣を実施して（地域からの声）

●参考となった事項

- ・ 沖縄県内のエコツーリズム推進というと、環境への負荷を低減するための利用者数制限等の規制の問題が第一に挙がる。今回の研修場所であるやんばる学びの森は、自然散策路の整備も十分であるため、環境への負荷は軽微である一方、ツアー参加者が期待するワイルドな経験としては不満が残っているのが現状であり、施設外のフィールドの活用も検討しているが、環境負荷の問題は常にある。
- ・ 豊かな自然の中で、①カヌーやマリンスポーツのような体験そのものに価値を有するツアー、②珍しい生き物を紹介するガイドウォークツアーは、活用するフィールドへの影響を十分に考えながら活用することが重要である。今後世界遺産登録等で知名度があがり、急激な利用客の増加が起こった場合、フィールドへの負荷が少なく、かつ参加者に自然の中で過ごす楽しさを提供するためには、今回のようなお客様が中心となるようなツアープログラムの発展が必要と考える。
- ・ エコツーリズム推進のためのツアーガイドの育成講座等は、比較的良好に実施される地域ではあるが、ツアーを通してお客様に何を伝えたいか、その方法は何かという本質的な問題について真剣に考える良い機会となった。

●その他感想

- ・ 当地域は、生物多様性の豊かな地域として、特定の動植物にどうしても注目が集まり、ガイドの内容も、生き物の解説に留まる場合が多い。派遣時期は、沖縄でも中々動植物の観察が難しい冬であったこともあり、見ることでできない貴重な生き物の解説を中心とするのではなく、もっと自然や森の中を自分の目や耳で感じるための工夫を盛り込むことの大切さを改めて感じた。

(6) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

公益財団法人キープ協会 環境教育事業部 シニアアドバイザー 川嶋 直 氏

●地域におけるエコツーリズム推進の取組の現状

- ・ 国頭村は、世界自然遺産候補地になっている琉球諸島の中でも、やんばるの森の核心地域を有しており、現在は、森林地域を活用したガイドツアーや森林セラピーを推進しています。
- ・ 環境省や県は、国立公園及び世界遺産地域指定に向けての施策を進めていますが、米軍基地問題等により指定にはなお時間を要するということです。
- ・ 以上をふまえて、現在森林地域のツアーを実施している団体として、関連団体の連携を強化するとともに、地元ガイドの育成や環境教育的要素を深めたツアープログラムの開発を進めていくことで、今後の世界遺産指定に備えていただければと思います。

●アドバイス（講義等）の概要

【やんばる学びの森ツアー体験・指導】

- ・ 2つの森のコースの案内と新設されたカヌーコースの体験をしました。
- ・ ツアー時間中はアドバイザーが体験することに重きを置き、ツアー終了後に具体的な改善に向けたアドバイスを行いました。
- ・ 以下には、当日午後川嶋がガイドさんたちに向けて直接お伝えしたアドバイスに加え、体験後1週間を経て考えたアドバイスも書いてみました。
- ・ 通常プログラム（ガイド内容と方法）は、ガイド（あるいはインタープリター）が作るものですが、実は参加されるお客様が作ってゆく要素も多いものです。つまりツアーに参加されるお客様に受けの良い話題やトピックが段々生き残って行き、そうして生き残った「ガイドの持ちネタ」がそのプログラムを構成してゆくということです。この現象自体が善い悪いということではなく、お客様のリアクションにその位影響されながら、段々プログラムが研ぎ澄まされてゆくというような感じでプログラムが成長して行ければ良いなあというアドバイスです。
- ・ 小道具を使うことも重要なポイントです。今回は出発前のオリエンテーション時に、やんばるの生き物を紹介した写真集（という小道具）を使っていたのですが、できるだけオリジナルなイラストや写真そして大事なキーワード等を書いたフリップ（A4~A3 大の硬い紙）をツアーに持参して、必要な場所で必要なフリップを取り出して使うと良いと思いました。また、このフリップは「個人持ち」ではなく、できるだけ複数のガイドが共通のフリップを持つようにすることでプログラムの質的維持が図れるようになると思います。
- ・ ガイドが「話す・見せる・連れてゆく」、それに対して参加者は「聞く・見る・付いてゆく」、この関係性が持続するのが通常のガイドツアーですが、時代は「参加体験型」です。ただただ、ガイドの後を歩き、ガイドの話の聞き、ガイドの示すものを見ることの繰り返しでは中々高い評価が得られません。高い評価が得られないということは、世間への評判が広がらない＝新たな集客につながらないということです。随所に参加者が「参加」できる場面を用意してください。（小道具を使うことで参加できるヒントは、滞在3日目の朝の川嶋の体験プログラムにあると思います）

【第1部：講演会・ワークショップ】

- ・ 地域のガイドの方たちを中心に、環境省のスタッフ等多彩な20数名にお話をさせていただきました。
- ・ 講演はパワーポイントによるプレゼンテーションではなく、KP法（紙芝居プレゼンテーション法）によって行いました。このアナログなプレゼンテーション法は、野外でのガイド中にも（クリアファイルやスケッチブックを使い、あるいは人間ホワイトボードを使ったりして）活用できるので、この講演ではKP法を使用しました。
- ・ またKP法は、伝える内容を、シンプルにコンパクトにしなければならないプレゼンテーション法なので、必然的に伝える内容を絞込み、要点だけを鋭く短く伝えるための思考整理を行うことができます。
- ・ 主に、コミュニケーションの手法について、丁寧にシンプルに伝えることに傾注しました。
- ・ 講演のあとに、小グループで講演を聞いた感想を話し合う「ペチャクチャタイム」を実施し、その結果出てきた質問に答えました。

【第2部：フィールド実習】

- ・ 前日ガイドに案内していただいたコースを使って、その同じコースを「参加体験型」のプログラムで実施したらどうなるかの例を体験していただきました。
- ・ コースは約650メートルありましたが、そのうち入口から150メートル程を使って約2時間さまざまな体験アクティビティを実施しました。
- ・ 使用したコースは、全て両脇に手すりがついて、そこから先（つまり森の中）には出られない状態で、幅約1.5メートルの細長いルートで16名の参加者を参加させるという、少し難易度の高いフィールドでのプログラム実施でした。
- ・ 視点を変える小さな鏡や、目玉を書き入れる白い丸いシール等の小道具を使いながら、見る、触る、作る、考える、表現する等の行為を参加者にしていただき、一緒に楽しんでいただけたと受け止められました。
- ・ 2時間のプログラム体験の後、研修室に戻り、どういう構造としてプログラムが組み立てられていたのかの意図開きをした後、昨日同様に「ペチャクチャタイム」を実施し、その後の質問に答えました。

●地域に対する印象、コメント（メッセージ）

- ・ 自然素材が豊かであれば、豊かであるほどその素材自体の魅力に引っ張られてしまって、素材を伝えることだけに終始して、その素材を通して本来伝えるべき、その素材の後ろ側にある意味や価値を伝えられなくなるということがあると思います。沖縄でしか、やんばるでしか見られない出会えない珍しい生き物の魅力に寄り掛かり過ぎると、ツアー参加者の評価が「見れた、見れなかった」という点だけに集中し、ガイド（あるいはインタープリター）は、ただその珍しい生き物を見せるだけの案内人になってしまいます。
- ・ インタープリターはもっと別のことができる可能性を持つ存在です。ガイドツアーに参加された方たちとともに、さまざまな体験を通して地域の環境や文化・歴史全体の豊かさや魅力を伝えることができるはずです。ガイドの「知ってる・知らない」という知識量と「見れた、見れなかった」という偶然性に頼らない、その地域の魅力を伝えることができるインタープリテーションのプログラム開発が期待されます。
- ・ 今回研修を行った「やんばる学びの森」のような拠点施設が、やんばる全体の地域振興のための「戦略会議室」になってゆくことを強く期待します。